

松山東雲短大。大原早苗 森田貞子 宮内秀和 伊藤裕子 那須野昭文

目的 第1報では、快適性におよぼす物理的性質を明らかにする目的で、住居における各種床面様式の官能検査と物性測定を行ない、手ざわり、坐り心地、踏み心地などの快適性（好悪感）と硬軟感、温冷感、粗滑感など物理的屬性との対応を検討し、寒い季節における床面様式は、暖かく、柔らかく、ふんわりとした特性を有するものが好まれるとの結果を報告した。本報では、蒸し暑い夏季の条件下で、官能検査と物性測定を行ない、温湿度のちがいによって快適性を左右する感覺的因子について検討した。

方法 試料は、前報の試料（板、畳、カーペット3種）のほか、夏季独特の床面様式として籐むしろ、ビニールコーティング敷物を加えて7種とした。これらを各種の組合わせで一対比較法による官能検査をし、シェッフエの評価法で統計処理をした。また温冷感、乾湿感に対応させる物理量として、人体表面での接触表面温度および人体発汗量と水分移動傾向について測定した。

結果 坐り心地の好悪感は、硬軟感がかなり寄与しているが、接触快適性には温冷感が最も大きく関係している。即ち夏季の手ざわりは、冷んやりとした特性を有するものが好まれ、冬季とはほぼ逆の結果となった。しかし、ビニールコーティング敷物のごとく冷感はあるても汗を吸収しないものはあまり好まれない。冬季には接触感、坐り心地ともにカーペットが快適であったが、夏季には両者を満足させる床面様式はなく、そのような製品の出現が期待される。現段階では、比較的これらの条件を満たす籐や畳が好まれており、わが国では季節にあわせて床面様式を変化させる暮らしの知恵が実証される結果を得た。